



〔資料紹介〕  
未公開の橋本関雪書簡と播州

堀澤光栄

このたび高砂の旧家より、橋本関雪や父海関の書簡類約80通ほどが発見された。明治37年元旦の絵入りの年賀状に始まり、関雪が翌38年に満州軍総司令部付き画家として従軍した折の軍事郵便6通を含み、昭和15年まで続いている。これらの書簡類はすべて高砂の大西兼次（かねじ）と跡を継いだ息子の史郎に宛てられたもので、兼次の孫にあたる大西文三氏が伝えてきたものである。

橋本関雪と播州のつながりについては平成9年に加古川総合文化センターで開催された「橋本関雪展」の図録において冷泉為人氏が詳細に触れている。父海関が明石藩の儒者であったことや、事情があって加古川尾上町というところに海関・関雪親子が隠棲したことなど、地名で言えば明石、二見、加古川、高砂、西脇などに関雪の播州での足跡をたどることが出来ることなどが述べられている。なかでも江戸時代から続いた豪商岸本家や二見の尾上家、江井ヶ島の田口家などとの交流が紹介されている。

大西家との交流はその中では触れられていなかったものの、書簡類を見る限り関雪との交際はかなり深いものがあったようだ。明治から大正・昭和三代にわたり長期にわたって橋本家が転居するごとに、また旅先からも事細かな報告をしていたことが窺われる。

関雪は父海関の経済的理由から、明治32年現在の加古川市尾上町養田に隠棲した。関雪16歳の時にあたり、その後結婚して京都に移る明治38年までの約7年間は関雪の播州時代とされる。関雪親子が移り住んだのは尾上町養田の尼寺（アンデラと呼ばれていた）のような地域の集会所のようなところだったと伝わる。現在はJR神戸線の脇で住宅が立ち並び往時の面影を残すものは何も見当たらない。

そこから西へ歩いて程近い加古川の相生橋を渡った先に、江戸時代の面影が残る高砂の街並みがある。関雪は多感な青年時代、貧窮の日々を放浪しながら、海関の縁故をたどって絵を売り歩いたといわれているが、中でも高砂の中心部に店を構えていた有力者岸本家と大西家からは格別の援助を受けていたようである。

ここで紹介する書簡類は明治末から当時高砂の北本町で郵便物（官報）の売り捌き所であり、味噌や醤油、酒類の卸販売業を営んでいた大西兼次商店の当主兼次との家族ぐるみの親密な交友関係から交わされたものである。兼次は関雪より7歳年上で町会議員も勤めた親分肌の面倒見のいい町の実力者であった。関雪のために大西家は「聴雪軒」とよぶ部屋まで用意していたという。



関雪従軍記念写真 明治38年（1905）  
大西家のアルバムより



大西兼次商店 明治41年（1908）11月頃

書簡を分類すると明治期のものが30通、大正期が37通、昭和期が7通、年代不明なものが9通となる。(一覧表参照) 差出人は関雪が直接認めたものが69通、よね夫人が代筆なりしたものが9通、父の海関<sup>(註1)</sup>が3通含まれている。ほとんどの書簡は巻紙に若年時から達筆な毛筆でしたためているが、昭和になると案内状や招待状のような印刷物も増えてくる。

さて、大西家の宛先標記は「播州加古郡高砂北本町」を基本としながら時代によって「播州加古郡」や「ハリマ加古郡、兵庫縣加古郡」などと変化している。また、当主の兼次は大正5年に40歳の若さで亡くなり、その後は銀行員だった長男の史郎が店を継いでおり、関雪からの手紙も大西史郎宛に代わっている。リストの中に史郎宛書簡は18通確認されるが、兼次のかずえ夫人あてのものも数通含まれる。

大西家の旧蔵作品については「播州高砂大西聴雪軒、加藤仙齡堂両家による売り立て目録」に、250件近い書画骨董が記載されている。芦雪や峯山、大雅、玉堂などの著名な画家が散見されるが、関雪はそのうち22件の記載があり一割近くに及んでいる。「殿中八仙小屏風」や「青緑孔雀二枚折」「馬上人物」などどんな作品であったか気になるところである。

ところで、書簡の中に当館で所蔵する作品、「従軍画卷」や「南国」に触れたところが何箇所も見られ興味深い。明治38年、関雪22歳のおり薦める人があって満州軍総司令部付嘱託として従軍している。この間の事情の一部を今回の6通の手紙からうかがい知ることができる。No 14の11月11日付けの封書の差出人が「満州軍総司令部附 画工 橋本関雪 十一月十一日夜」とあり、どうやら画工として従軍したことはこれからも知ることができる。



「従軍画卷」部分

この「従軍画卷」は平成12年度に収蔵した作品で縦23センチで横5メートル7センチの紙本淡彩の卷子形式となっている。これに海関が跋文「丹心千古」を寄せ、関雪自身が「従軍雑詩」と称した短詩6編と談笑する兵士や入浴や散髪など、戦場での日常を描いた14図が添えられている。しかし、いずれも戦場という緊張感は何一つなくむしろのんびりした兵士の様子が描かれているばかりである。



明治38年の「軍事郵便」

関雪が戦場に赴いた明治38年9月5日はまさにアメリカのポーツマスにおいて日露講和条約が結ばれ戦争が終結した日であった。したがって戦闘らしきものは終わっていたはずで、血なまぐさい場面が登場しないことが首肯されるのである。

従軍時の6通の書簡のうち最も早いものがこの9月5日に (No 9) 認められたもので、11月11日付け (No14) が最後である。その次に12月4日付け (No15) の広島からの葉書が続くので、関雪の従軍期間は9月から11月まで約3ヶ月弱だったことが分る。9月5日付けでは無事用務地に到着したこと、他の人には追々手紙を書くが取りあえず安着したことを知らせてほしいとあり、兼次との

親密ぶりが窺える。また、「画材詩料山の如くこれあり候ゆえ、いずれ沢山土産を持ち帰るべく候」などと記し「所在地は明記致し難く・・・」と結んでいる。9月20日付け（No10）は葉書で楽器を持つ二人の中国人が描かれ「従軍画卷」の画意に通じるものがある。

戦地から最後となる11月11日付け（No14）では、やや北の鉄嶺に赴いたところ、馬烽溝の河水が全部凍っており、髭も凍るほどの寒さで初めて戦場に在る心地がしたと伝えている。この時の見聞が明治41年の第二回文展で初入選した「鉄嶺城外の雪」（行方不明）という作品になって結実したことが容易に想像される。

大型の屏風「南国」についても大正3年11月27日横浜より発信された書簡（No52）のなかで次のような記述を見ることができる。「（前略）今回出品の「後苑」<sup>（註2）</sup>右御とりくだされてもよろしく尤も他より話これ有り尾上氏「南国」をとりし関係と増本氏より話これ有り候へども・・・（後略）」とあり、10月8回文展出品の2点がすでに翌月には誰が所有するかが取りざたされているのである。これを傍証するかのように姫路の鷺城新聞<sup>（註3）</sup>に二見の富豪尾上氏が2千円で売却したとの記事が掲載されている。

隠棲先だった尾上町養田に次いで関雪と播州の縁を永く継続することになったのが二見の別荘ということになるのか。本書簡の中ではこの二見を発信地にしたものが8通確認され、関雪夫妻が終生二見の地を好んだことが知られる。関雪は後年随筆の中でこのことに触れている。「すぐ明石だ、明石には父がいる、明石を過ぎると間もなく二見だ、お前（関雪の妻よね）は二見を愛していた。（中略）毎年夏になると子供や孫をつれて二見の家に行くことを欠かさなかった。」<sup>（註4）</sup>



白沙荘と看板のかかる旧蟹江鱸白荘  
正面（平成19年2月撮影）

そしてこの大正2年は関雪の生涯の中でも大きく飛躍する年となっている。5月にははじめての中国旅行を試み、翌年の第8回文展で二等賞を得る屏風「南国」の画想を持ち帰っている。9月には東京から京都岡崎徳成橋畔に居を移し、10月に明石二見の地にアトリエ蟹江鱸白荘（かいこうろはくそう）が竣工する。この翌年6月には完成披露宴を開くが、これに招かれた大西兼次あての招待状（No43）からも知ることが出来る。格天井に30畳敷き、瀬戸内海を臨む絶景の別荘で行われたこの日の宴会は京阪神や播州から100人余が集って盛大だったと前述の鷺城新聞にも記事が見られる。

96年を経た現在もこの建物は地元企業によって管理されており、生垣と見事な松が住宅街に不似合いな自然を残している。残念ながら目前の海はいくつもの工場に遮られて見えにくくなっている。ここから東二見駅に向かって数分歩けば関雪ゆかりの御厨神社<sup>（註5）</sup>がある。二見の別荘を気に入って家族で定期的に訪れていた関雪一家にとって、近くの神社には格別の付き合いがあったと



橋本関雪の名の刻まれた御厨神社の玉垣（昭和9年）

推察される。それを裏付けるように境内には関雪の名前を刻んだ大正11年と昭和9年の玉垣が二本あり、昭和9年の石柱には「一金壹百圓 京都 橋本関雪」と刻まれている。

こうして見ると書簡を手がかりにまだまだ多くの関雪と播州の関わりを解明することができよう。本稿ではその大西家書簡の目録を紹介するにとどめ、全容については今後の課題としたい。

(ほりさわ みつえい 当館学芸員)

注1 明石藩儒者、嘉永5（1852）年～昭和10（1935）年

注2 大正3年、第8回文展に南国とともに出品した六曲一双屏風

注3 23ページの（注1）参照

注4 昭和32年3月発行の「白沙村人随筆」＜播磨灘をゆく＞に所載。

注5 兵庫県明石市二見町東二見にある神社。

\*本稿執筆にあたり貴重な書簡を提供いただきました大西文三氏、ご協力賜りました御厨神社中嶋邦弘宮司ほかの方々に感謝の意を表します。

## 橋本関雪関連書簡一覧

番号	消印年・月・日	年齢	宛 名	発 信 地	差 出 人
1	明治37.1.1	21	大西兼次	京都	橋本関雪
2	37.3.20	21	大西兼次	京ト大宮下る岩見にて	橋本関雪
3	37.4.18	21	大西兼次	京ト大宮御池下る 岩見方	橋本関雪
4	38.2.2	22	大西兼次	京都大宮通御池下る 岩見方	橋本関雪
5	38.6.9	22	大西兼次	京ト	橋本関雪
6	38.7.3	22	大西兼次	摂津西灘村之内 岩屋村 群芳園にて	橋本関雪
7	38.8.16	22	大西兼次	神戸にて	橋本関雪
8	38.8.21	22	大西兼次	東京芝今入町 対陽館	橋本関雪
9	38.9.13	22	大西兼次	満州軍総司令部参謀部附	橋本関雪
10	38.9.20	22	大西兼次	満州軍総司令部参謀部附	橋本関雪
11	38.9.25	22	大西兼次	満州軍総司令部参謀部附	橋本関雪
12	38.10.17	22	大西兼次	満州軍総司令部附	橋本関雪
13	38.11.9	22	大西兼次	満州軍総司令部	橋本関雪
14	38.11.11	22	大西兼次	満州軍総司令部附	橋本関雪
15	38.11.	22	大西兼次	なし	橋本関雪
16	38.12.4	22	大西兼次	ひろしま	橋本関雪
17	38.12.10	22	大西兼次	東京芝区今入町三 対陽館	橋本関雪
18	38.12.	22	大西兼次	広島長浜旅館にて	橋本関雪
19	39.8.14	23	大西兼次	神戸市加納町二丁目四十六ノ二十	橋本関雪
20	39.10.19	23	大西兼次	神戸市花隈町四丁目六十	橋本関雪
21	39.12.7	23	大西兼次奥様	神戸市花隈町	橋本よね
22	40.9.9	24	大西兼次	明石町の内明石旧●水塚丁	橋本関雪
23	41.12.12	25	大西兼次	常磐土浦停車場官舎佐藤方	橋本関雪
24	42.1.1	26	大西兼次	東京市下谷区上野薬学校前	橋本関雪
25	42.2.17	26	大西兼次	加古川寺家町増田や	橋本関雪
26	42.11.1	26	大西兼次	東京市下谷区下谷清水町19	橋本関雪
27	43.3.11	27	大西兼次	明石榎谷村 山本源ベエ	橋本関雪
28	43.3.13	27	大西兼次	明石榎谷村 山本源兵衛様方	橋本関雪
29	43.4.23	27	大西兼次	明石人丸山六	橋本関雪
30	45.2.1	29	大西兼次	二見増本別荘	橋本関雪
31	大正1.8.8	29	大西兼次	東京にて	橋本関雪
32	2.5.22	30	大西兼次	蘇州にて	橋本関雪
33	2.10.3	30	大西兼次	京ト岡崎徳成橋北詰	橋本関雪
34	2.10.23	30	大西兼次	京トにて	橋本関雪
35	2.10.28	30	大西兼次	横ハマ本町四 高野屋内	橋本関雪
36	2.11.25	30	大西兼次	京ト岡崎町	橋本関雪
37	2.12.20	30	大西兼次	京ト岡崎徳成橋北詰	橋本関雪
38	2.12.27	30	大西兼次	京トにて	橋本関雪
39	3.3.12	31	大西兼次	京都岡崎町	橋本関雪
40	3.4.7	31	大西兼次	岡山市中出石町読藪亭	橋本関雪
41	3.4.9	31	大西兼次	なし	橋本関雪
42	3.5.2	31	大西兼次	琴平町備前屋にて	橋本関雪
43	3.6.2	31	大西兼次	加古郡二見港	橋本関雪
44	3.7.11	31	大西兼次	京ト	橋本関雪



形状と内容物	備 考
葉書 毛筆 6行 (年賀状-絵 朝日に鳥)	2月に岩見よねと結婚
書簡 巻紙毛筆 30行 (絵 腕組みの自画像)	
書簡 巻紙毛筆 58行	
書簡 巻紙毛筆 16行	
葉書 巻紙毛筆 9行 (絵 婦人の後ろ姿)	
書簡 巻紙毛筆37行	
葉書 毛筆 7行	
葉書 毛筆 9行	
書簡 巻紙毛筆42行 軍事郵便	安着の報告
葉書 ペン書き 6行 軍事郵便 (絵 中国人二人)	
書簡 箋 2通 2枚 毛筆表裏17行、6行 軍事郵便	
書簡 満州軍総司令部箋 2枚 毛筆45行 軍事郵便	
書簡 箋毛筆 6行 軍事郵便 *一部欠損	
書簡 満州軍総司令部箋 2枚 毛筆45行 軍事郵便	
葉書 毛筆 9行 (絵 満州国総司令部凱旋記念 三越呉服店広告)	
葉書 毛筆 6行	
書簡 巻紙毛筆17行	
封緘葉書 赤鉛筆19行	
書簡 巻紙毛筆44行	
葉書 毛筆10行	
書簡 巻紙 2通 2枚 毛筆20行、16行	
書簡 巻紙毛筆36行	京都黒谷浄源院に居住
書簡 巻紙毛筆67行	
書簡 巻紙17行 印刷	
書簡 巻紙毛筆43行	
書簡 巻紙毛筆46行	
書簡 箋 2通 2枚 毛筆58行、11行	
書簡 巻紙毛筆31行	
書簡 巻紙毛筆72行	
葉書 毛筆10行	
葉書 毛筆10行	
絵葉書 ペン字13行 (写真 蘇州の東屋)	大正2(1913)5月中国へ。重慶、上海、蘇州、満州、朝鮮を経て6月末帰国。
書簡 巻紙毛筆43行	9月岡崎徳成橋畔に居 (年譜より)。
葉書 毛筆10行	10月明石市二見蟹江鱸白荘が竣工。
書簡 巻紙毛筆23行	
書簡 巻紙毛筆67行	
書簡 巻紙毛筆53行	
葉書 毛筆朱書、7行	
書簡 巻紙毛筆50行	
葉書 毛筆 6行	
絵葉書 毛筆 7行 (写真 備中豪溪天柱)	
書簡 巻紙毛筆39行	
葉書 (蟹江鱸白荘完成披露宴招待状-印刷 9行)	二見の別荘に京阪・播州より約100人が集まった。
葉書 毛筆10行	

番号	消印年・月・日	年齢	宛 名	発 信 地	差 出 人
45	3.8.2	31	大西兼次	二見	橋本関雪
46	3.8.16	31	大西兼次・かず枝	二見港にて	橋本関雪
47	3.8.29		大西兼次	京ト	橋本よね
48	3.9.19		大西兼次	加古郡二見村	橋本よね
49	3.9.21		大西兼次	二見港にて	橋本よね
50	3.10.5		大西かずゑ	二見港にて	橋本よね
51	3.10.26		大西かずえ	京都銀閣寺前	橋本よね
52	3.11.27	31	大西兼次	横浜市本町四 高野屋内	橋本関雪
53	3.11.28	31	大西兼次	横八万にて	橋本関雪
54	3.●●	31	大西兼次	二見	橋本関雪
55	4.●.29	32	大西兼次	神戸天王金佐亭ニテ	橋本関雪
56	4.3.31	32	大西兼次	京都南禅寺山内	橋本関雪
57	4.4.17	32	大西兼次	二見にて	橋本関雪
58	4.5.29		大西兼次	京都 南禅寺山内	橋本よね
59	4.6.24		大西兼次	京都 南禅寺山内	橋本よね
60	4.9.15	32	大西兼次	豊後別府温泉板倉旅館	橋本関雪
61	5.5.27	33	大西兼次	京都南禅寺山内	橋本関雪
62	5.6.9		大西かずよ	京都銀閣寺前「京都市洛東南禅寺山内」	橋本よね
63	5.11.4		大西史郎	明石忠度丁	橋本海関
64	5.10.29	33	大西史郎	京都銀閣寺前、京都市洛東南禅寺山内	橋本関雪
65	9.11.12	37	大西史郎	京都銀閣寺前	橋本関雪
66	10.6.3	38	大西史郎	パリ、PARI HOTEL DES GRANDSHOMMES PLACE	橋本関雪
67	13.4.22	41	大西史郎	京都東山銀閣寺前	橋本関雪
68	昭和2.12	44	大西史郎	なし	橋本関雪
69	6.9.11	48	大西史郎	京都東山銀閣寺前	橋本よね
70	7.6.8	49	大西史郎	京都銀閣寺前	橋本関雪
71	8.4.2	50	大西史郎	住所なし、橋本関雪、橋本節哉、橋本田鶴子、橋本正躬、高折妙子一親族の連名	橋本関雪、ほか
72	8.4.17	50	大西史郎・かずよ	京都市銀閣寺前	橋本関雪
73	12.2.21	54	大西史郎	京都市東山銀閣寺前	橋本関雪
74	15.1.1	57	大西史郎	なし	橋本関雪
75	不明		大西兼次	明石人丸下	橋本海関
76	不明11.26		大西兼次	明石人丸下	橋本海関
77	不明		大西史郎	なし	橋本関雪
78	不明		大西史郎	なし	橋本関雪
79	不明12.29		大西史郎	大崎にて	橋本関雪
80	不明		大西史郎	なし	橋本関雪
81	不明		大西史郎	京都	橋本関雪
82	不明2.14		大西史郎	京都東山銀閣寺前	橋本関雪
83	不明			未使用	橋本関雪
(参考)					
1	10.10.23	52	大西史郎	事務所 京都丸太町川端東入ル 奥宮方	祝賀会・有志会
2	13.11.28	55	大西史郎	京都市東山銀閣寺前	新篁會

※年齢は関雪の年齢

※発信地は本人の表記に従った



形状と内容物	備 考
書簡 罫線箋毛筆21行	
書簡 巻紙毛筆18行	
葉書 毛筆 6 行	
書簡 巻紙毛筆42行	
書簡 巻紙毛筆24行	
書簡 巻紙毛筆34行	大正3(1914)10月、第8回文展で「南国」が二等賞となる。
書簡 巻紙毛筆34行	
書簡 巻紙毛筆68行	「後苑」「南国」の売買に触れている。
書簡 巻紙毛筆48行	
書簡 巻紙毛筆28行	
書簡 巻紙毛筆30行	
書簡 巻紙毛筆36行	
書簡 巻紙毛筆35行	
書簡 巻紙毛筆44行	南禅寺山内金地院に住む。
書簡 巻紙毛筆38行	
書簡 巻紙毛筆49行	
葉書 毛筆 8 行	
書簡 巻紙毛筆16行	
葉書 毛筆 6 行	
書簡 巻紙毛筆31行	大正5(1916)京都市左京区浄土寺石橋町に移る、白沙村荘と名づける
封書 (洋封筒)	
絵葉書 (写真Notre Dame)	大正10 (1921) 4月～12月外遊
書簡 案内状と返信葉書 1 枚	所蔵の古彫刻書画などの陳列の案内状
葉書 (年賀状欠礼あいさつ印刷)	昭和 2 (1927) 4月～翌年 1 月外遊
書簡 箋印刷14行 ふく紗の送り状	皇后陛下下賜の白絹をふく紗にして配った
書簡 巻紙毛筆20行	昭和 7 年 4 月、よね夫人死去 葬儀の礼状
書簡 箋印刷19行、返信用葉書	よね夫人一周忌の案内状
葉書 毛筆 5 行	
書簡 (洋封筒)、茶会案内状印刷 1 通と引換券 2 枚	南都西大寺茶の湯会の案内状
葉書 (年賀状印刷 7 行)	紀元2600年新年
書簡 巻紙毛筆20行	
書簡 巻紙毛筆13行	
書簡 毛筆32行 *封筒は不明	
書簡 毛筆13行	
書簡 2 通、罫線毛筆 6 行、箋毛筆17行	
書簡 2 通、巻紙毛筆14行、巻紙毛筆14行	
書簡 巻紙毛筆20行	
書簡 巻紙毛筆10行	
自筆絵葉書 梅の絵	
書簡 橋本閔雪画伯帝室技藝員任命 祝賀會趣意書 (印刷)	
封書、案内状 (印刷)	

(大西文三氏 所蔵)

《参考》



No. 1



No. 5



No.10



No.17



No.66



No.83

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document fragment. The text is dense and difficult to read due to the cursive script.



No. 2

Handwritten text in cursive style, continuing the letter or document. The text is dense and difficult to read due to the cursive script.

Handwritten text in cursive style, continuing the letter or document. The text is dense and difficult to read due to the cursive script.

No. 9

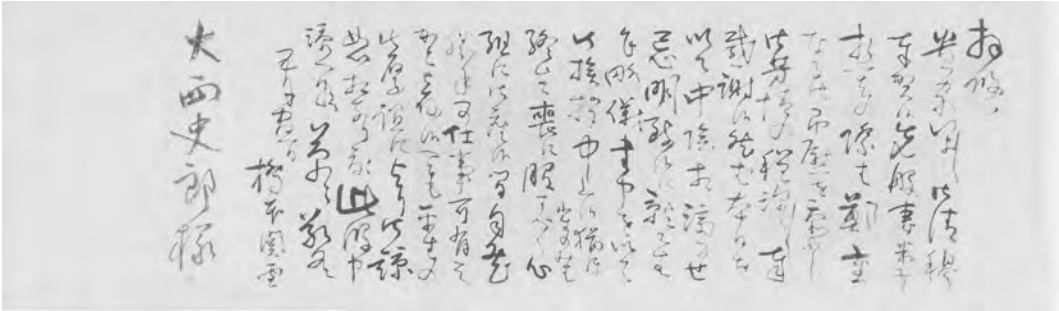


初月  
 四の五の成世の初月  
 光の初月...  
 今上...  
 大下...  
 出...  
 平...  
 出...  
 初...  
 初...

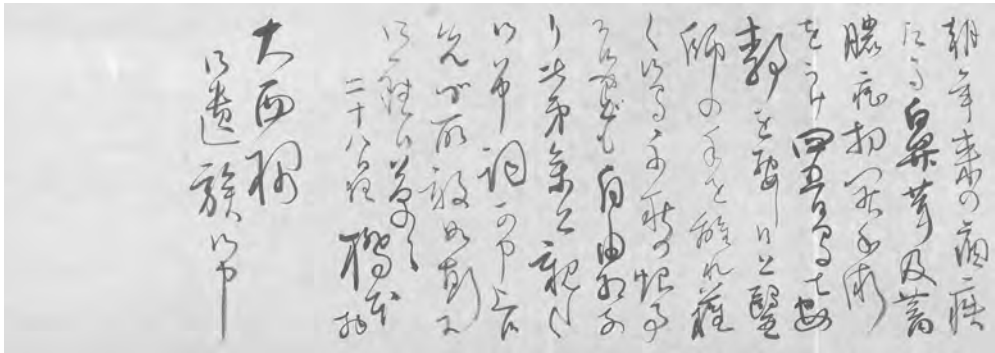
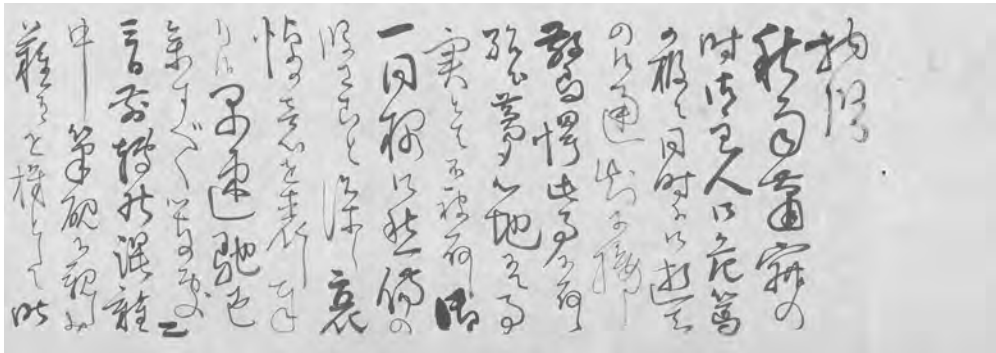
の壽...  
 の...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...  
 初...

No.14

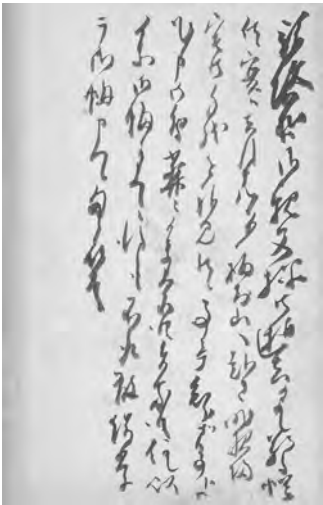
本橋お智君  
 西兼治  
 附 東三橋本再志  
 了了了了



No.64



No.70



No.62

姫路市立美術館 研究紀要 第7号

平成19(2007)年3月発行

発 行 姫路市立美術館  
兵庫県姫路市本町68-25  
tel.079-222-2288

印 刷 所 小野高速印刷株式会社  
姫路市平野町62